子どもの誕生による夫婦関係の変化に関する研究

尾洲病院 伊藤規子
岐阜大学教育学部学校教育講座 別府哲
岐阜大学教育学部学校教育講座 宮本正一

Stability and Change in Marriage across the Transition to Parenthood in Japan

Noriko ITO
Bishu Hospital, 37 Arata, Kohibino, Azai-chou, Ichinomiya, Aichi 491-0104
Satoshi BEPPU
Department of Psychology, Faculty of Education, Gifu University, Yanagido, Gifu 501-1112
Masakazu MIYAMOTO
Department of Psychology, Faculty of Education, Gifu University, Yanagido, Gifu 501-1112

In order to assess marital change in response to birth of a first-born infant, 242 volunteer couples were studied at their last trimester of pregnancy, the first, third, and ninth postpartum months. Individual spousal questionnaires were used. Analyses of mean scores revealed reliable changes in marital adjustment, as assessed by Braiker and Kelley (1979). A developmental focus upon group change indicates the addition of a first-born infant has a negative impact on the marital relationship. This decline in marital quality was most evident in the case of wives.

キーワード：夫婦関係，子どもの誕生，横断的研究

Key words: marital adjustment, birth of a first-born infant, cross-sectional study

最近の日本における子育ての事情として，核家族化及び少子化などの社会的状況の変化に加え，女性の意識の変化，母性感の変化(大日向1991a; b, 1992)，などから子供を育てることが以前よりも難しい時代になっている。このような社会的状況のもとで初めて子供をもつ母親が大きな不安に駆られるのは当然の現象であるのかもしれない。そのような場合一番身近にいる夫が精神的な支えになることができれば問題は早く解決できるであろう。しかし子どもが誕生すると男は外で仕事，女は内で家事・育児という性別分業が強化されていく循環があり，夫婦の協力が必要とされている時期に，逆に夫婦の提携がしにくい構造になっている（森川 1990)。したがってはじめて子供をもった夫婦の関係がどのように変化するのか研究が必要とされている。心理学の分野においても，子供を育てることに対して，家族や親が危機あるいは困難な状況に直面しているという認識から，親としての発達過程の研究への要請が高まってきている。

これまで発達心理学の分野では，親についての研究でも，扱われているのは殆どが母親であり，父親が登場することはなかった（柏木・若松1994)．アメリカでは父親の研究は1975年以降急激に増加したが，それでも焦点は子供の発達への影響(松田1993)であり，親の側にたった親自身の発達をとりあげたものではなかった。しかし，エリクソン（1989）は生涯発達の立場から，成人期の親としての発達にも注目している。成人期の発達課題は「世話」であり，そのためには育児や家事にかかわる仕事を分担し，さまざまな感情を共有する親密な夫婦関係が重要であると述べている。日本における研究の中でも，最近やっと夫婦関係にも関心が向けられるようになり，子育てをする際に夫婦の関係が母親の心理状態に大きく影響することが示されている。夫との関係がよいと親として

の自信が高く，欲求不満や拘束感は少ないこと(数井1995)あるいは制約感が少ないこと(柏木・若井1994)が報告されている。

子供の研究に母親だけでなく父親が加えられたことから，夫と妻の関係，すなわち夫婦関係も問題にされるようになってきた．夫婦関係については，アメリカでは従来，家族社会学と発達心理学と臨床心理学の3つの分野において別々に研究されてきたが，Belsky (1981) はこれらの学問分野が統合される必要性を述べ，家族を構成している1人1人よりも家族の関係と役割を強調した枠組みを考えた。それは3つの家族システムの成分，すなわち，夫婦関係 (Marital Relationship)，子供の行動及び発達 (Infant Behavior and Development)，養育(Parenting)が互いに他の2方向に影響し影響されている図式である．この図式からも夫婦関係が重要な位置を占めていることがわかる。またBelsky(1984)のプロセスモデルの中で，養育(Parenting)を決定する要素として，①両親のパーソナリティー，②子供の特徴，③ストレスやサポートの資源の3つをあげているが，夫婦関係がパーソナリティーと養育に深くかかわっていることが示されている．これらのことからも夫婦関係を研究する必要性が分かる。

さて，はじめて子供をもつとどういうことが起きるのか。まずおこるのは日常生活の大きな変化であるが，また一方で夫婦関係においても変化を余儀なくされる。家族が2人から3人になることは，夫婦関係と質に変化を与え，新しい役割を要求し，新しい人間の発達をもたらす(Belsky, Rovine, & Fish, 1989)。はじめて子供をもった夫婦の関係について，ベルスキー・ケリー(1995)は次のようにのべている。「はじめて子供をもつことに大きな期待をよせていた夫婦は，半年もすると以前より親密さを増すどころか互いに離れているのに気づく。それは子供そのものが生みだすストレスとは関係がない。親への移行それ自体の中に2人を隔てていく分極化傾向がある。原因は，男女の生物学的な違い，夫婦それぞれの人間形成の過程や個人的体験の違い，各夫婦の家族的な背景の違いによるが，それらは子供を持たない時期には，あまり夫婦の間で顕在化させずにすむ。それに対し，子供がうまれると上記の違いが回避できない事態が生じやすい（たとえば性別役割分業に対する考え方の違い)。結婚生活がよくなるか悪くなるかは，これらの違いを越えて互いに手を差し伸べられるかどうかである。」

Belsky et al. (1983,1985) は質問紙を用いて親への移行期における夫婦の関係の変化を調べ，移行期に結婚生活が悪化する場合が多い(約50%)ことを指摘している。日本においてこのような移行期の夫婦関係の変化を扱った研究はまだないが，このような傾向は，日本でも見られるのだろうか。日本における従来の研究は，養育態度や子供の発達との関係で夫婦関係が問題にされてきてはいるが，他の要因との関連において見たもの(数井1995，数井・武藤・園田1996，牧野1982，柏木・若松1994，大日向1991b)であった。その意味で夫婦関係自身を対象にして，それが初めての子供の誕生というライフイベントによってどのように変容するのかを直接検討することが必要とされている。

したがって本研究では子供をもつことによる親の発達を問題にし，はじめて子供をもつ夫婦の夫婦関係の変化について実証的研究を行った。夫婦関係を測定する尺度としてBraiker and Kelley (1979)を用いた。本研究では，①夫婦関係を直接測定したこと，②回想ではなく現時点での感情を質問していること，③夫婦をペアで問題にしていること，④夫婦は別々に回答して返送してもらったことが特徴である。

本研究の仮説として，仮説1：子供をもつことで夫婦関係は悪化するだろう，仮説2；悪化は夫よりも妻の方が大きいだろう，をあげた。

方　法

被験者

被験者は，結婚して初めての子供を妊娠している，あるいは育てているカップルである。被験者が出産前の場合は，妊娠の最後の3ヶ月すなわち妊娠8ヶ月，9ヶ月，10ヶ月のいずれかの人であり，育児中の場合は出産後1ヶ月，3ヶ月，9ヶ月の人を対象とした。本研究の被験者の属性をあげると，年齢の平均は夫29.4才，妻27.5才で，平均結婚月数は25.27ヶ月，平均妊娠週数は32.9週，子供の生後日数は1ヶ月が38.0日，3ヶ月が123.1日，9ヶ月が277.6日，核家族は82.3% であった。

質問紙

質問紙はフェイスシートと夫婦関係についての質問項目から構成されている。

A夫婦関係

Braiker & Kelley(1979)の親密な関係を測定する4つの尺度（Love, Maintenance, Ambivalence, Conflict）を用いた。この尺度は25項目から成り，配偶者との関係を9段階で評定するようになっている。本研究では，評定のしやすさを考え5段階で評定した。愛情（Love）はお互いの愛着感情の程度を評定している(例えば“どのくらい相手に属しているという感じをもっていますか”)。関係維持（Maintenance）は2人の関係を良くしたり維持するためにした行動の程度を評定している（例えば“あなたは夫婦の関係で望んでいることを相手に言いましたか”)。結婚への両価性（Ambivalence）は2人の関係についての疑いや不確実性を測っている（例えば“相手に対するあなたの感情は混乱する時がありますか”)。トラブル（Conflict）は，夫婦関係の特徴を，けんかをする程度によって評定している（例えば“あなたと配偶者はどのくらいけんかをしますか”)。

先行研究ではこれら4つの尺度の内的一貫性は.611から.877で，平均は.745であった。

B：フェイスシート

夫と妻双方に共通する項目は年齢，結婚月数，学歴，職業である。妻だけに関する項目は，妊娠前の仕事の有無，出産後の就労の意志，妊娠週数である。夫だけに関する項目は，帰宅時間である。家族全体に関する項目は，家族構成，同居人，年収，出産後の年収の増減，出産から自宅に戻った時期である。子供に関する項目は，性別，出生体重，出産予定日，調査時の生後日数である。さらに妊娠したときの気持ちを夫と妻の両方に質問した。そして子供が望まれた子供であるかどうか，時期は適当だったか，妻には妊娠を知ったときの気持ち，出産時に里帰りをしたかどうか，里帰りの期間はどのくらいであったかも質問している。里帰り出産のことを尋ねたのは，その間夫との別居が考えられること，妻の母親からの援助が考えられるためである。

手続き

質問紙は夫用と妻用を作成し，返信用切手を貼った封筒に別々にいれて1セットとして配布した。質問紙には2週間ぐらいの間に答えてもらうよう依頼した。質問紙の配布の方法は次の4つのいずれかによった。①妊婦または母親が集まる場所でこの研究についての概観を3分間ほど述べた後，研究に同意してくれた人に質問紙を配布した，②医師または看護婦を通じて配布してもらった，③1人1人に説明をし，個人的に回答を依頼した，④集団での説明の時に同意してくれた人に後日適当な時期に郵送した。

参加者の募集の方法は次のようにした。出産前の被験者は，2ヵ所の保健センターでの母親教室の参加者，2ヵ所の産科病院での母親教室の参加者，1ヵ所の公立病院での母親教室，および両親学級への参加者である。配布方法は上記の①である。出産後1ヶ月の被験者は，3ヵ所の産科病院，および3ヵ所の公立病院の1ヶ月健診に来た人で，配布の方法は上記の③が主で，一部②が含まれる。出産後3ヶ月の被験者は，2ヵ所の保健センターでの4ヶ月健診の参加者であり，配布方法は上記の①である。出産後9ヶ月の被験者は，1ヵ所の保健センターでの7ヶ月健診の参加者および1ヵ所の保健センターでの離乳食教室の参加者である。研究に興味を示した人に住所，氏名を教えてもらい，9ヶ月時に電話をして参加の同意を確かめてから質問紙を郵送した。

その結果517 名から回答が得られた。このうち夫婦のペアは242 組であった。

調査期間

1997年6月から8月まで行った。

結　果

因子分析

Braiker & Kelley(1979)の質問項目に対して，N＝517 のサンプルについて主成分分析を行った後，Varimax回転をして4因子を引き出した（Table 1)。さらに妻だけの場合（Table 2）と夫だけの場合（Table 3）に分けてそれぞれ因子分析を行い，因子構造を比較した。その結果，ほぼ同様な因子構造であったので，夫と妻を合わせた

場合の結果によって以下の分析を行うことにした。

Table 1 因子分析の結果（夫と妻）N＝517

因子	固有値	寄与率	累積寄与率
第1因子	6.467	25.9	25.9
第2因子	3.511	14.0	39.9
第3因子	1.640	6.6	46.5
第4因子	1.290	5.2	51.6

Table 2 因子分析の結果（妻だけ）N＝273

因子	固有値	寄与率	累積寄与率
第1因子	6.544	26.2	25.2
第2因子	3.207	12.8	39.0
第3因子	1.662	6.6	45.7
第4因子	1.299	5.2	50.8

Table 3因子分析の結果（夫だけ）N＝244

因子	固有値	寄与率	累積寄与率
第1因子	6.580	26.3	26.3
第2因子	3.771	15.1	41.4
第3因子	1.701	6.8	48.2
第4因子	1.253	5.0	53.2

Braiker & Kelley(1979)の尺度の構造は，性別によって違いのないことがわかった。これらの因子の内容については，Table 4 からTable 7に示した。

Table 4　第1因子（愛情）（ α＝.8768）

項目番号	項目内容	因子負荷量
10	愛情の絆で結ばれている	.798
7	相手を非常に自分に近い存在だと感じている	.775
5	相手との関係は，今まで親しかった別の人との関係に比べ特別である	.753
6	相手と深くかかわつている	.736
8	相手の存在が必要である	.704
3	愛している	.677
4	相手に何かが起きたとき，影響を受ける	.668
9	性的に親密である	.568
1	相手と一心同体であると感じる	.542
11	相手と互いに話し合いをする	.509

Table 5　第2因子（関係維持）（α＝.7603）

項目番号	項目内容	因子負荷量
23	自分たち夫婦の関係の質についてよく話し合いをする	.788
22	2人の間にある問題を取り除くために話し合ったり努力した	.715
25	夫婦の関係で望んでいることを相手に言う	.700
24	2人の間にある問題を解決するために，自分の態度を変えようとした	.682
2	2人の関係をよくするために努力したと思う	.457

Table 6　第3因子（結婚への両価性）（α＝.7349）

項目番号	項目内容	因子負荷量
20	夫婦関係を続けることで追い込まれたりプレッシャーを感じたりした	.760
19	相手があなたの時間や気配りについて多く要求しすぎると感じる	.692
18	相手との結婚を続けることに、迷いや不安を感じたりすることがある	.599
17	相手と一緒にいることで、自分の自立性がそこなわれると感じる	.569

Table 7　第4因子（トラブル）（α＝.6109）

項目番号	項目内容	因子負荷量
15	相手に否定的感情を伝える	.735
13	相手に対して怒ったり恨んだりすることがある	.685
16	相手への自分の思いが混乱したことがある	.515
21	夫婦の間のプライベートなことを他人に言ったことがある	.505
12	いやだと思っている相手の行動や態度を変えようとした	.503
14	議論になるとき話題は深刻である	.490

第１因子は愛情や親密さ，愛着の感情を表しているので「愛情」の因子と命名した。第2因子は夫婦の関係を維持するための行動を表しているので「関係維持」の因子と命名した。第3因子は相手に対する感情の混乱，これ以上関与が増すことへの疑問，独立性を失うことへの心配などの感情を含んでいるので「結婚への両価性」因子と名づけた。第4因子は夫婦の間の議論やけんか，問題の発生を意味しているので「トラブル」因子と命名した。

夫婦関係の変容

４つの因子毎に因子得点を求め，夫婦関係の時間的変容をFig.1からFig.4に示した。対象は夫婦ともがそろっている被験者を選んだ（N＝484，

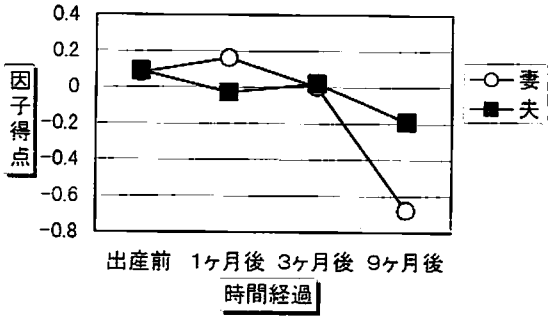

Fig. 1　夫婦の「愛情」因子得点の変化

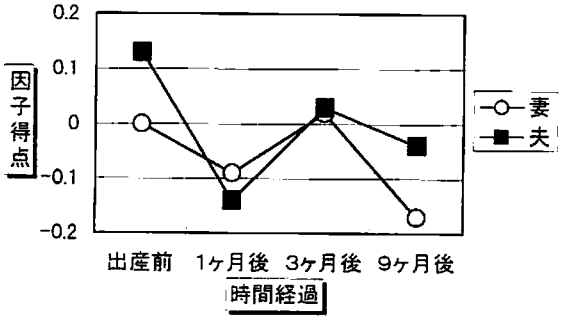

Fig. 2　夫婦の「関係維持」因子得点の変化

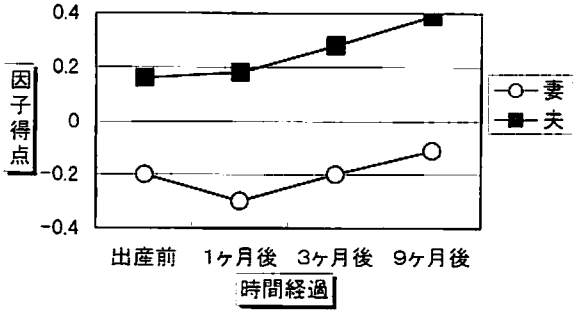

Fig. 3　夫婦の「結婚への両価性」因子得点の変化

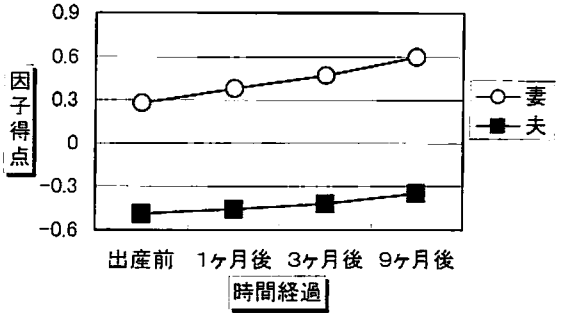

Fig. 4　夫婦の「トラブル」因子得点の変化

妻＝242,夫＝242 ）。４（時期：出産前，１，３，９ヶ月）×２（夫，妻）の２要因分散分析を行った結果，まず第１因子の「愛情」については時期の主効果が有意（F [3,476]＝5.140 , p<.01）であったが，夫婦の主効果は有意ではなく，交互作用も有意ではなかった。第２因子の「関係維持」については２つの主効果，交互作用とも有意ではなかった。第３因子の「結婚への両価性」については時期の主効果は有意ではないが，夫婦の主効果が有意であった（F [1,476]＝22.609 , p<.001)。交互作用は有意ではなかった。第４因子の「トラブル」については時期の主効果は有意ではないが，夫婦の主効果が有意（F [1,476]＝100.218 , p<.001)であった。交互作用は有意ではなかった。

夫と妻の因子得点の相関

夫と妻のペア（242組)についての夫の因子得点と妻の因子得点の相関を求めた。出産前，１ヶ月，３ヶ月，９ヶ月の相関の値をTable 8に示した。

Table 8 夫と妻の因子得点の相関

因　子	出産前 n＝109	出　産 1ヶ月後 n＝53	出　産 3ヶ月後 n＝46	出　産 9ヶ月後 n＝34
愛　情	.290**	.165	.208	.614***
関係維持	.577***	.536***	.238	.383*
結婚への両価性	.116	.108	.384**	.281
トラブル	.086	.069	.236	.179

＊ p<.05　＊＊p<.01　＊＊＊p<.001

「愛情」因子は出産前と出産９ヶ月後に有意な相関を示すが，出産１ヶ月後と出産３ヶ月後には

相関の値が低くなっている。夫婦の関係維持のための行動については，いずれの時期においても相関の値は大きい。出産前，出産後1ヶ月，出産後9ヶ月時に有意な値が得られた。「結婚への両価性」因子得点では，夫婦の認知はあまり一致はしないが，出産後3ヶ月時に有意な相関が示された。この時期には「結婚への両価性」因子得点だけが有意な値を示していることが注目される。「トラブル」因子得点に関してはいずれの時期においても有意な値を示さなかった。

結婚の質の変化

Belsky, Rovine, & Fish(1989)は，夫婦関係には否定的側面と肯定的側面があると考えた。そして，その夫婦関係は否定的側面が大きいのか肯定的側面が大きいのかはその時々で異なるので，その比で結婚の質をあらわすと考えた。結婚の否定的側面，肯定的側面，結婚の質は次のようにして求めた。結婚の否定的側面は，第3因子「結婚への両価性」因子と第4因子「トラブル」とを合計したもので，結婚の肯定的側面は，第1因子「愛情」，第2因子「関係維持」とを合計したものである。結婚の質は否定的側面を肯定的側面で割って100かけたものである。この値が高くなれば，結婚の質が低下したことを表す。それぞれの平均をFig.5からFig.7に示した。

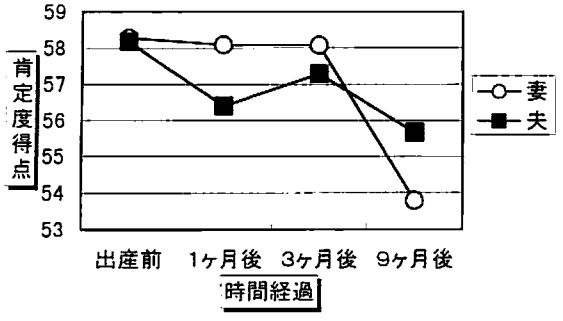

Fig. 5　結婚への肯定的評価得点の変化

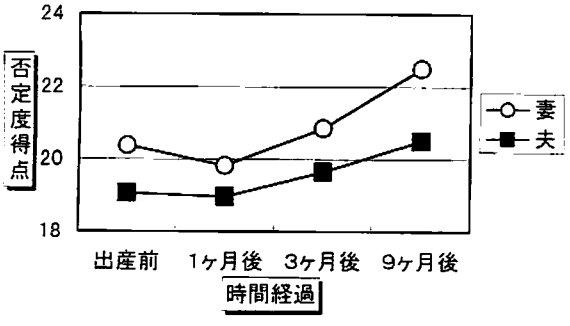

Fig. 6　結婚への否定的評価得点の変化

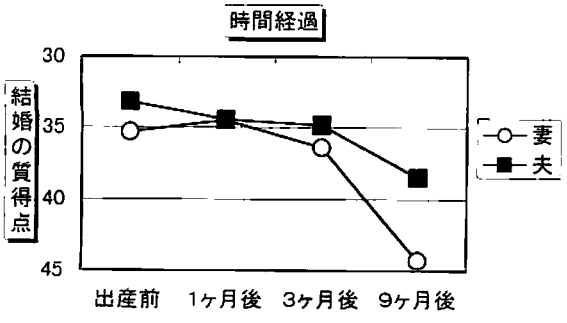

Fig. 7　「結婚の質」評価得点の変化

時期4（出産前，1，3，9ヶ月）×2（妻，夫）の2要因分散分析を行なったところ有意差が得られた。時期に主効果が見られたのは，結婚の肯定的側面（$F=5.530$, $p<.01$），結婚の否定的側面（$F=3.120$, $p<.05$），結婚の質（$F=7.916$, $p<.001$）のすべてであった。夫婦に主効果があったのは，結婚の否定的側面（$F=8.745$, $p<.01$）と結婚の質（$F=4.471$, $p<.05$）であった。

これらから結婚の肯定的側面は3ヶ月から9ヶ月で減少し，否定的側面が出産後直線的に増加する。結婚の質は出産後低下し，特に妻は9ヶ月時に出産前よりも大きく低下していることがわかる。

考　察

本研究の2つの仮説，仮説1：子供をもつことで夫婦関係は悪化するだろう，仮説2：悪化は夫よりも妻の方が大きいだろう，を検討する。

夫婦関係の4つの因子得点を分散分析した結果，「愛情」因子 に時期による主効果が認められ，夫，妻ともに時間がたつにつれて愛情は低下した。妻の9ヶ月の「愛情」得点は特に低く，9ヶ月<出産前，1，3ヶ月であることが示された。また夫婦関係を全般的に見ると，結婚の否定的側面と結婚の質の平均得点が，出産後増加していることから，出産によって結婚の質が低下すると言える。これらのことから「子供をもつことで夫婦関係は悪化する」という仮説は支持された。

次に，夫と妻の比較であるが，妻の愛情は9ヶ月時に夫よりもかなり低いことと，「トラブル」因子は妻の方が夫よりもかなり高いので，「愛情」と「トラブル」因子に 関しては，妻の方が悪化

したと言える。結婚の否定的側面は妻>夫であり，結婚の質（否定的側面／肯定的側面）も出産後は妻>夫なので，妻の方が夫婦関係が悪化すると言える。しかし，「結婚への両価性」については夫の方が妻よりも高いので，これに関しては悪化は妻の方が大きいとは言えない。出産後妻は慣れない育児に忙しいので2人の関係について考える暇がないのでだろう。したがって「夫婦関係の悪化は妻の方が大きい」という仮説は，部分的に支持されたと考えられる。

縦断的研究ではあるが，Belskyらの先行研究と比較すると，夫と妻の相関は「愛情」「関係維持」「結婚への両価性」「トラブル」のそれぞれの尺度について，出産前，出産3ヶ月後，出産9ヶ月後のすべての時点で有意に正の相関が得られている(Belsky, Lang, Rovine, 1985)。

同様に夫婦関係の4つの尺度の変化についても見てみると，子どもの誕生によって「愛情」と「関係維持」の得点は時間とともに有意に減少し，「結婚への両価性」は時間とともに有意に増加していた（Belsky, Spanier, & Rovine 1983; Belsky, Lang, & Rovine 1985; Belsky & Rovine1990)。「トラブル」については報告された結果は一貫しておらず，Belsky, Lang, & Rovine (1985)では有意な増加を，Belsky & Rovine (1990)では妻だけに有意な増加が報告されているのである。

本研究では，結婚の質は平均して悪化するという結果が得られたが，それぞれのカップルについて時間が経過すると結婚の質がどう変化するのかはまだ分析していないのでわからない。今後縦断的研究によってこれらを調べる必要がある。ベルスキー・ケリー(1994)の縦断的研究の結果によれば，平均の結婚の質が低下しても，それぞれのカップルについてみてみると，「ひどく悪化」と「少し悪化」をあわせて約50%，「変化なし」が30%，「向上した」が19%あり，全体の平均が悪くなっても，必ずしも全部のカップルが同じように結婚の質が悪くなるとは限らないということが示されている。Belsky & Rovine(1990)においては，子供が誕生してからの夫婦関係の変化のパターンを4つに分け，夫婦関係が悪化したカップルと向上したカップルを区別する要因を探っている。その結果出産前の結婚のデータや，親のパーソナリティーや，3ヶ月，9ヶ月時点での子供の気質が出産後の低下する結婚を区別できるといっているので，本研究のデータについても今後分析したいと考えている。

本研究では，子供が生まれることによる夫婦関係あるいは結婚の質の変化を，質問紙を用いて測定した。しかし，子供がうまれることに対して出産前にもっていた子供や配偶者，そして自分自身に対してもっていた「期待」と，出産後の現実の生活とが違っていた場合の評価のしかたによっても結婚の質が変わることがあるかも知れない。

本研究から，妻の夫婦関係の変化の方が夫の夫婦関係の変化よりも先におこるという興味ある結果が得られた。このことはCowan(1985) でも確かめられている。Fig.7 から，結婚の質の平均得点は，1ヶ月時には夫と妻は同じであるのに，3ヶ月時には妻の方は高くなっている（悪化している）のに対し，夫の方は1ヶ月時とかわらない。9ヶ月後では夫婦の食い違いはさらに広がる。言い換えれば，3ヶ月時に妻は結婚の質の低下を自覚しやすいが夫はまだ低下を自覚していないので，ここで妻と夫との間にずれが生じやすいのではないかと思われる。

さて，子どもをもち育てるということはどういうことなのかを，今回の研究を通じて感じたことをまとめてみる。それは男女に平等に与えられた課題であり，その課題をどう乗りきるかを試されるひとつの機会なのではないかと考えられる。本研究からみてきたように，確かに子どもが生まれることで，結婚の否定的側面が増大し，結婚の質が低下することが確かめられた。しかしその困難を2人で解決し，2人の子どもが生まれる前のよい状態に戻るのではなく，新しい2人の関係を作りだす方向に2人が変化することができれば，そこでカップルはまた新しい関係を経験できることになると考えられる。

子供をもつことは，今まで育てることも含めて女性の仕事とされ，母子関係や母親のありかただけが問題にされてきたが，今述べたような観点に立てば，これは男性にとっても女性にとっても同じ意味での大人の成長の機会である。それは精神的な自立と言い換えた方がよいかもしれない。子どもをもつことで，今までは自分が育てられている受動的な立場であったのが，育てるという能動的な立場におかれることによって，自分の両親に目を向けたり，周囲の人々に目を向けることで世界が広がるし，また子どもの成長を目の当たりに

見ることで，自分ももう一度生き直しているのだと考えられる。課題を解決することで人格的成長を遂げることは，氏家(1994)やBraiker & Kelly (1979) の考え方からも明らかである。ベルスキー・ケリー(1994)にもあるように，子供をもつことでばらばらの2人になるのではなく，1つの共同体としての“わたしたち”という単位をいかに作るかが重要になってくる。そのためには，妻だけに変化を求めるのではなく，夫の方も共に変わろうという意識がなければ，2人の関係はうまくいかなくなるし，子育ても困難になると思われる。

引　用　文　献

Belsky, J. 1981 Early human experience: AFamily perspective. *Developmental Psychology*, 17, 3-23.

Belsky, J. 1984 The Determinants of Parenting: A process Model. *Child Development*, 55, 88-96.

Belsky, J., Spanier, G.B., & Rovine, M. 1983 Stability and change in marriage across the transition to parenthood. *Journal of Marriage and Family* 45, 567-577.

Belsky, J., Lang, M., Rovine,M., 1985 Stability and change in marriage across the transition to Parenthood; A second study; *Journal of Marriage and the Family*, 47, 855-866.

Belsky, J., Rovine, M., Fish, M. 1989 The Developing family system. *In M. Gunnar and E. Thelen (eds.), Minnesota Sympo sia of Child Psychology*, Vol.22, System s and development (Chap.4, 119-166) Hillsdale. N.J.: Lawlence Erlbaum.

Belsky, J., Rovine, M., 1990 Patterns of marital change across the transition to parenthood: Pregnancy to three years postpartum. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 5-19.

ベルスキー，J.&ケリー,J.安次嶺圭子訳 1995 子供をもつと夫婦に何が起こるか 草思社
(J. Belsky & John Kelly 1994 The Tran sition to Parenthood, How a First Child Changes a Marriage, Why Some
Couples Grow Closer and Others Apart, BASED ON A LANDMARK STUDY A Dell Trade Paperback.)

Braiker, H. & Kelly, H. 1979 Conflict in the development of close relationships. *In R. Burgess and Huston (Eds.), Social Exchange and Developing Relationships.* (Chap.5, 135-168) New York: Academic Press.

エリクソン，E.H.／村瀬孝雄・近藤邦雄(訳) 1989 ライフサイクル，その完結 みすず書房

柏木惠子編 1993 父親の発達心理学－父性の現在とその周辺 川島書店

柏木惠子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み 発達心理学研究，5,72-83.

数井みゆき 1995 親役割ストレス・夫婦関係・親子関係の父母比較～家族システム的視点に立って～家庭教育研究所紀要，17，73-82.

数井みゆき・武藤　隆・園田菜摘 1996 子供の発達と母子関係・夫婦関係・幼児を持つ家族について発達心理学研究，7,31-40.

牧野カツコ 1982 乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞ 家庭教育研究所紀要，3，34-56.

松田　惺 1993 第8章 父親の子どもへの発達の影響，柏木惠子編 父親の発達心理学 (267-308).

森川早苗 1990 女性の自立と新しい家族の創造 現代家族のゆらぎを越えて ,家族心理学年報 8，金子書房 112-125

大日向雅美 1991a 第7章 「親としての発達」，児童心理学の進歩1991 vol.XXX 橋口英俊他編 (154-179). 金子書房

大日向雅美 1991b 子どもの誕生は結婚生活にとって福音かストレスか 家族心理学年報9，25-38.

大日向雅美 1992 第18章 「親としての発達」，現代の発達心理学 藤永 保編 有閣 (264-277).

氏家達夫 1996 親になるプロセス 金子書房

氏家達夫・高濱裕子 1994 3人の母親：その適応過程についての追跡的研究 発達心理学研究，5，123-136.

調査にご協力をくださいましたご夫婦の方々，県立岐阜病院，東海中央病院，守山市民病院，後藤マタニティクリニック，てしがわらレディスクリニック，可世木病院，稲沢保健所，稲沢保健センター，尾西保健センターの関係者の皆様に深く感謝致します。